

田中研新聞

第140号

2025年
1月1日発行

甲南大学知能情報学部田中研究室 ほぼ毎月発行
http://carnation.is.konan-u.ac.jp
編集責任 田中雅博

明けまして

おめでとーいございます

田中雅博



年頭所感

年賀状じまいー私は しません

今年は、年賀状じまいの連絡がことのほか多く、驚きました。確かに、ほとんど顔も覚えていない相手から、何かの理由で年賀状を始めてから、やめるきっかけがなく、出し続けている相手には、やめるのもいいでしょう。一度出し始めたら、やめるのも難しいです。相手からまたまた来なかつたから、もうやめるつもりかと思つて翌年出さなかつたら、相手から早々に来て、慌てて返事を出したという例は数多く経験しました。しかし、今年は最後まで出

し続けるだろうと思つていた同僚の先生や、身内までそういう連絡をしてきたので驚きました。一部の人が出すのをやめたいから、全部やめてしまふというアナウンスをしてやめるというのであればそれはやりすぎですね。年賀状をこの人には出したくないというのがあるなら、まず、自分から出さない、相手から返事を出さない、これでいいのではないのでしょうか。

いや、そうではなく、本当に年を取つて年賀状を出すのがおっくうになるというケースも多いのではない

か。本当の高齢者の苦労はまだ私にはわかりませんが、そこで行つてなくてもそういう理由をつけてやめるという人も多いように感じています。年賀状じまいをするという連絡してきた人は、ぼろぼろやつてくる年賀状にどう対処するのでしょうか。その都度、年賀状じまいをした旨書いて返事をするのでしょうか。それこそ面倒なことと思われま

す。年賀状を出し合うようになった人とのつながりはその人にとって貴重な人的なつながりができていたということだと思われま

す。で、それを自分のほうからやめずという連絡をするのは、絶縁状を出すに等しいことではないかと思われま

す。はがき代が85円になったからといって、それを理由にやめるほどたくさん出してたのでしょ

うか。100枚出して、1年に8500円。家族でどこかに遊びにい

たら、1回でこの額を超えるでしょう。遊びにいくより、年賀状書きで1日ついでやすほうがよほど自分たちのためになるのではない

のでしょうか。高齢になると、人への興味

がなくなつてくるという

ことだと思われま

す。宮沢賢治の詩ー私は好きです

先日盛岡に行き、駅前の自販機の左右の鉄板に宮沢賢治の詩が印刷されているのを見つけた(写真)。

ここに詩を見てみました(読みやすいひらがなバージョン)。

雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫な体を持ち 欲はなく 決していからず

だというように私は感じま

す。そういう意味で、この詩は、平和主義ですし、核兵器がこんな

に広まれば人類が生き延びるための方法は、敵に勝る兵器を持つこと

ではなく、相手の立場を重んじる教育をすることだと私は思

います。核兵器は、使えば相手も使い、自分も滅びま

す。使えない兵器です。



「星の図」(星野道雄著)

雨ニモケズ 風ニモケズ 雪ニモ夏の暑サニモケズ 丈夫な体ヲ持ち 欲ハ無く 決していからず

ここに詩を見てみました(読みやすいひらがなバージョン)。

雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫な体を持ち 欲はなく 決していからず



田中雅博

「新渡戸稲造の教え」

12月に盛岡に出張し、そこで知った岩手県出身の著名人として、先ほどの宮沢賢治、石川啄木や新渡戸稲造がいます。

盛岡駅から歩いて15分ほどのところに生家があったので、朝の散歩に歩いて行ってみました(写真は生家跡にある彼の像)。

新渡戸の著作は、宮沢賢治の詩のような、独り言のような形ではなく、散文で書かれた思想書です。彼の思想は、今の世にも十分に通じる、「勝つ、打ち勝つ」という、いわゆる強い人間になるためのものとい

うてよいでしょう。それが、あの有名な「武士道」に表されています。

私はまだ武士道を読みこなせていないので、ここでそれについて拙論するのは避けませんが、彼の著作に「自分をもっと掘れ！」(三笠書房)があります。「ひとりよがりの生き方をやめろ」「苦勞が顔に出ない人の厚み」「自分を大きくする怒り、小さくする怒り」など、12章からなり、ハウツーもの

だと言つてよいでしょう。ハウツーものが好きな方、ぜひ一度新渡戸のものを読ま

れたいと思

います。宮沢の詩に「けつしていつも静かに笑

告知

最終講義は2月12日(水) 甲南大学岡本キャンパス1号館131教室で行います。参加登録は不要です。甲南大学の講義室で快適に授業を聞いてみるチャンスです。興味がある方はどなたでもご自由にご参加ください。そのあとのパーティのほうは、事前登録が必要です。もしご希望があれば、田中宛メールか電話をください。ご案内します。



12月18~20日

田中・芦川、盛岡へ

SICEーSI2024

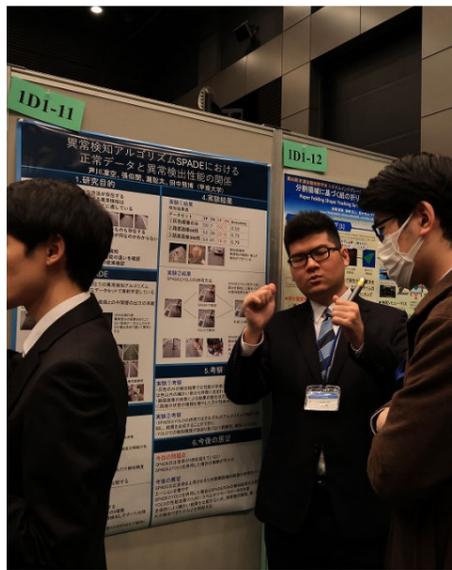
今年の計測自動制御学会システムインテグレーション部門発表会（SICE 2024）は12月18日～20日に盛岡のアイーナいわて県民情報交流センターで開催されました。

SIはロボット学会学術講演会や日本機械学会の講演会であるRobomec

h同様、ポスター発表が中心で、最近コンピュータをベースにしたものづくりの世界では、この形式の発表が主体となっています。

SIもポスター発表が中心ですが、短いプレゼンテーション（今回は1分）とのセットになっています。前は3分でした。いずれも、

質疑応答の時間は含まれておらず、ダイジェスト版といたところ。ポスターは30分ずつで半分ずつがコアタイムとなっていますが、通路を通るとも困難なほど人が多く、今後はもう少し会場にゆとりを持たせるべきだろうと思います。



田中研究室では、SIには10年前くらいから参加しており、2014年は、野々口君が「Kinectによるラジオ体操探点システム」の試作と評価で優秀講演賞を受賞して以来、大西氏、岩崎君が受賞し、相性の良い学会となつていま

す。今回は私がおそらく最後の参加となるため、院生に参加を呼び掛けたところ、芦川君が参加してくれました。盛岡は行ったことがなく、12月の盛岡に非常に興味もあつて、楽しみにして参加することができました。

私は、計測自動制御学会ユニバーサルデザイン応用研究会のメンバーのため、その委員会へ出席することができました。（田中）

行われたSICE2024に参加しました。SIに参加するのは2回目、今回は前よりも発表時間が短く、スタート1分、ポスター30分だったため説明できることに限りがあり、難しかったです。また、今回貰った質問は新しい発見はなかったですが、リアルタイムでお実行に関する質問を多く貰ったため修士論文ではその部分を強調しようと思つています。ほかの人の研究や企業展示に関しても面白そうなものや意外性のあるものがありました。特に企業展示の空中にモニターの画面を出力してタッチま

でできるというのは未来感がありました。岩手に行くのは初めてで、また冬の東北は初めてだったので、寒くて驚きました。特に雪がどこかしらに溶け残っていたのが印象的です。今回は会場もホテルも駅の近くでまとまっていたので、飲食店や店なども駅にたくさんあつたため遠くまで移動する必要がなかったのが良かったです。食べ物もおいしいものを多く食べました。今回は最後の学会だったので、修士の活動の最後の修士論文と期末発表を頑張ります。

今年度は、会議で来年度以降の議題には参加を免除してもらったり、授業をノルマ最小限まで減らしたことが功を奏し、特に後期、時間がたっぷりできて、余裕のある生活をしていきます。よく、退職に近い先生は会議にも出ないという話を聞きますが、私の場合は自分のノルマを果たしており、そういう非難を浴びることなく快適にできるような学部長のご配慮に感謝しています。

退職前夜

大きな変化に戸惑いますが適応します

もうすでに何度もこの新聞にも書いてきたように、私はこの3月末に定年退職します。

その後は、ソフトウェアを作ったり、非常勤講師として講義したり、依頼された講演をしたり原稿を書いたりという新しい生活を計画しています。

退職後は、船に乗って長期の旅行に出たり、好きな趣味に没頭したりという話もよく聞きますが、私の周りにはあまりそういう生活をしている人はいないようです。特に、船旅は長期間拘束され逃げ道がありませんので、もっとも嫌悪しています。

どういう生活にするか、まだまだはつきりとはしません。一つはつきりして

いることとして、私の場合、学会活動はする必要はなく、論文も書く必要はなく、書くメリットはないということです。学生の指導は、非常勤講師をする中で必要最小限のことはしますが、それがメインではないという事です。ただ、現在は、論文を書いたり、学生の指導をしたりというのがまだ主体的な生活をしていまして、4月になって急に切り替えられるのか、不安を感じています。むしろ、年金生活が始まるので、そのイメージを描くことのほうが重要なのですが、なかなかそちらに頭が回りません。この、田中研新聞すら、2月15日号で終刊の予定にしているのですが、まだ、記事を書くことに頭を悩ま

し続けています。

私は、2021年度から4年間、「情報英語」の授業を担当してきましたが、この名称の授業はどうも全国を探してみてもないようです。珍しい試みのようです。2025年度は非常勤講師としてこの授業を前期と後期開講します（同様の内容を2クラスという形で）。

この科目の目標としては、情報系の研究者として英語が必要となる場面を考え、そういう場面を想定した授業内容にしてみました。具体的には、

・講演を聞く（TEDトーク、Steve Jobsのスタンフォード卒業式の

講演）
・Call for Papersを読み解く
・プレゼンテーションのポイント
・空港や機内でのアナウンスの理解
・テーマに沿って英文を書く

などを、ネット上の動画を使いながら組み立ててやってきました。

来年度からは、この授業しかないで、時間をかけて内容の詳細を作った授業に臨みたいと思つています。また、このような試みを理解していただいた方から、自分の会社で1日まるごと授業をしてほしい、本を書いてほしいなどを要望をいただいております。会社向けのオプションも含めて（電話の応対など）、内容の充実を図っていきたくと思つています。私にとつてこのチャレンジは退職後の仕事の柱の1つとなるかもしれません。

▼1月25日 卒業研究発表会
▼2月10日 修士論文発表会、博士公聴会
▼2月12日 16:30～18:00 田中教授最終講義（1号館1-31講義室）、18:30～20:30 退職記念パーティー（i Commons）

次号は、田中研新聞最終号です（2月15日予定）。141号が最終号となりそうです。どのように締めくくれるのか、不安と楽しみが入り混じっています。

退職まで3か月、最終講義まで40日ほどとなりました。何かと気ぜわしい今日この頃です。

今年度は、会議で来年度以降の議題には参加を免除してもらったり、授業をノルマ最小限まで減らしたことが功を奏し、特に後期、時間がたっぷりできて、余裕のある生活をしていきます。よく、退職に近い先生は会議にも出ないという話を聞きますが、私の場合は自分のノルマを果たしており、そういう非難を浴びることなく快適にできるような学部長のご配慮に感謝しています。

時間があると、自分の時間の使い方も自由度が格段に増し、いままでもう少しも疎かになつていた授業の準備、研究なども少し丁寧にすることができています。何より大きいのが、本を読む時間があるということです。今まで買ってはあ

るが読む時間がなかった本を、本棚を眺めながら手に取つてみて、すでに紙の色が茶色になつた本を初めて開き、この本はこういうことが書いてあつたのか、と遅ればせながら気づく日が続いています。夕食後や休日、自宅でも本を読むと、テレビを見るのは忙しいからだと気づきます。

これでも、通勤に往復3時間かけているのですから、近場に住んでいたら、自分ができることはもっと多かつただろうと思つています。

生成AIの応用技術の開発

今後、高齢者の比率がさらに増加する中で、介護現場での生成AIの応用技術は、今後急速に必要性が高まるものと考えられます。実際に、現場で役に立つ技術開発をもくろんでいます。また、それに加えて、さまざまなセンサーを利用した、IoTシステムの開発も行つつもりです。この辺りのことを始めたら、退職後の仕事は10年くらいはやりたいことがあります。80歳まで、できれば85歳まで社会に貢献していきたいと思つています。

生成AIの応用技術の開発

生成AIの応用技術の開発

生成AIの応用技術の開発